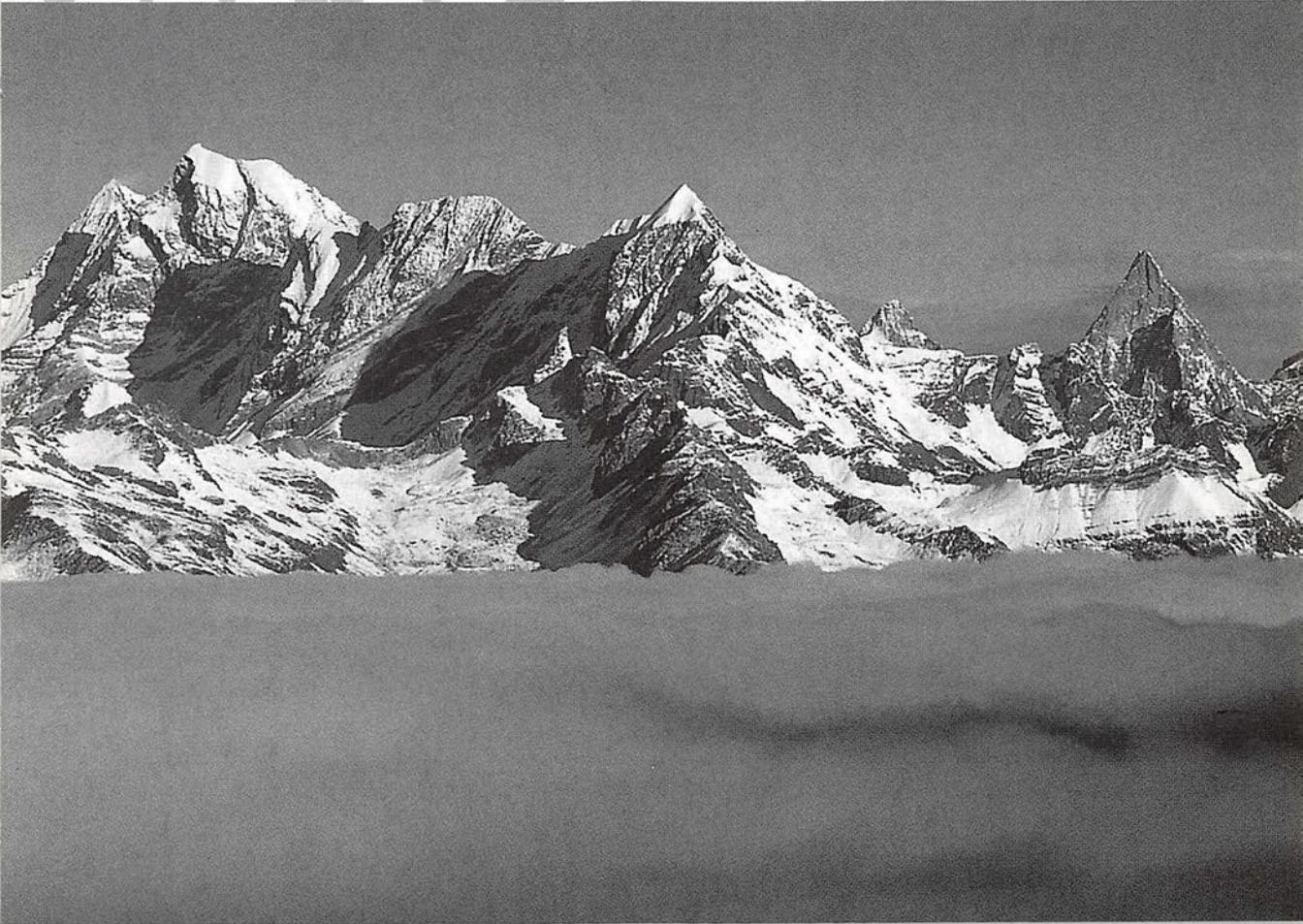


HIMALAYA

ヒマラヤ

No.332



1999 JULY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

2000年H A J サマー・キャンプ隊員募集

3週間で登るヒマラヤ

H A Jでは、長い休暇のとれない方を対象として、成田を出発して登山を行い成田に帰着するまでの期間を「3週間程度」で済ませる登山隊を企画しています。概略は、往復に2週間、登山期間1週間程度です。当然対象山岳は「6千メートル級の山」となります。期間は、7月中旬～8月下旬の3週間です。具体的には中国、インドとなります。来年夏に休みをとれる方は早目にご連絡下さい。希望者が早く決定できれば良い企画が生まれます。負担金は60万円程度です。

チョム・カンリ (7,048m)

ラサから西北西約106kmの所にあるのが、チョム・カンリです。1996年秋中国・韓国合同隊によって初登頂され、97年春に日本隊が登頂しています。ルートは既登の南面を予定していますが、隊員の協議によって変更される場合があります。

記

1. 期間:2000年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:85万円
4. 切り:定員になり次第

ニンチン・カンサ (7,206m)

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に3隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

H A Jの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期間:2000年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:85万円
4. 切り:定員になり次第
5. 申し込み:H A J事務局まで

表紙写真

四川省の成都からラサに向う飛行機がとび立つとすぐに右手に「スークニャン・6,250m」の雄姿を見ることができる。この写真は別の角度からの航空写真である。

(記: 山森欣一、撮影: 譚明)

ヒマラヤ No.332

- | | |
|-----------------------------------|------------|
| 1. PEOPLE | AZIZ AHMAD |
| 2. パキスタン国際山岳観光会議報告 | 寺沢 玲子 |
| 5. イエティの存在を追う(Ⅲ) 1994年イエティ捜索隊レポート | |
| 15. ガンカー峰とリャンカン峰を考える | 山森 欣一 |
| 16. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス〉 | |
| 18. 中国高峰登山15年小史(23) 西藏その9 | |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

PEOPLE

これまでパキスタンでの登山では、シェルパを同行する登山隊はごく限られていたが、近年大規模な登山隊を中心にその数を増してきた。フンザやバルトロ周辺地域を始めシムシャルなどにも高所ポーターはいるのだが、カラコルムでの登山活動に高所ポーターの助けを必要とする隊は少数派であった。ネパールやインドでの登山より登頂率の低い理由の一つでもあったであろうが、逆に言えば、それだけ登山者側の実力に負う登山ができたのがパキスタンであろう。全く異なる文化を持ち、しかも登山者への“サービス”の仕方に慣れたネパールからのシェルパの大量同行で、ただでさえ少ない職を脅かされたパキスタン国内の高所ポーターたちからクレームが出たのも無理はない。登山担当の観光局ではこの事態を憂慮し、高所ポーターとしてのシェルパの入国を禁止した。

また、近年の公募登山の風潮の流れの影響なのか、個人的に登山許可をシェアする登山者も増えてきている。それにともない、登山隊と日本国内間の連絡が一本化されず、有事の際に誤解やミスが生じやすくなってきている。

日本の登山の流れでも、これまでのように日本山岳協会の推薦状を取得後在日本パキスタン大使館を経由して登山申請をする隊は減り、現地エージェント経由で直接申請する隊が圧倒的に多いのが現実である。

それらの事情にともなって、登山担当者の仕事もこれまで以上に煩雑を極めていることであろう。

1997年9月、アジズ・アームド氏が、新しくその登山関係の担当となられた。

氏は1941年9月生まれの57歳。現北西辺境州州都のペシャワール出身。3歳の時にラワルピンディに移り住み、その地で少年時代を過ごした後、ペシャワール大学に進学。卒業後会計士事務所を経て1976年観光省に入省し、1997年9月現在のポストに就任。

アジズ氏は、昨年一年間登山者と直接接した経験から、次のようなメッセージを下された。

日本の登山者には同じアジア地域の者として、



西欧の隊よりより親しみを覚える。また、パキスタンを訪れる登山者やトレッカーの数も多く、日本人にとってパキスタンのイメージは、それ程悪くないのだと安心している。

過去の日本の登山隊のうわさ話を耳にすると、連絡官へのクレームを自分たちの中に抱えたまま帰国したケースもあるとか。クレームはブリーフィング時に遠慮なく出して、不満や誤解を抱いたまま帰国しないで欲しい。英語やウルドゥ語に不自由な登山隊は、デ・ブリーフィング終了後でもかまわないので、文書で提出して欲しい。その積み重ねで少しずつパキスタンの登山環境を改善していきたい。パキスタン政府にとって、登山はそれ程プライオリティがないので、外からの声を聞くチャンスがあまりない。ぜひ登山現場の人々からいろいろな意見を出して欲しい。

また、パキスタンの悪いイメージを伝え聞いて、それを鵜呑みにして欲しくない。確かに、イスラムの国は西側諸国にとっては異文化の国であるため、必要以上に誤解されているくらいがあるが、パキスタンには美しい風景や心暖かい人々、そして何よりカラコルムやヒマラヤの素晴らしい山々がある。

外貨獲得のため、K2の登山料をエベレスト並みに四万ドルに引き上げるべきだ、との声も上がってきているが、あくまで登山者側の意見にも耳を傾けていきたい、と語られた。

最後に、環境保護は大切だよ、と念を押された。

パキスタン国際山岳観光会議報告

1999.5.4～5.6 於ペシャワール

5月4日～6日、パキスタン北西辺境州州都ペシャワールのパール・コンチネンタル・ホテルでパキスタン国際山岳観光会議が開催された。

海外からは14カ国計35名のジャーナリストや登山関係者が出席、日本からはグリーン・クラブ代表の遠藤京子氏、インダス・ツアー社のサジャド・シャー氏、トライウエル・インターナショナル社の田島和江氏の三氏と、日本ヒマラヤ協会の寺沢玲子氏が出席した。因に、参加国はオーストラリア、フランス、中国、ハンガリー、イタリア、ニュージーランド、オランダ、ポーランド、スイス、アメリカ合衆国、イギリス、ネパール、インドそして日本である。また、観光省からの特別依頼を受け、日本の登山隊やトレッカーにもなじみの深い日バ旅行社の大住恵子氏も出席し、パキスタン国内の関係者と併せて約250名の参加を見た。

主な議題は、パキスタンの山岳観光開発の可能性と、誤解されているパキスタンのイメージの回復であった。

山岳観光開発に対する外国人招待客からの具体的な提案としては、フランスのベーター・ハット氏が、「パキスタンの列車観光旅行」と題して、英国統治時代に設置され、現在でも不定期に運転している蒸気機関車による観光客誘致を、ポーランドやインド、アルゼンチンおよびドイツの例を引用して説明した。

オーストリアのベアトリクス・ピレチュナーさんは、観光事業を促進するために、公共機関を効果的に機能させ、将来開発する地域のリサーチ、観光地へのトイレの設置などの他、ヴィザ取得手続の簡素化などを訴えた。

国内外のエージェントからは、アウト・ドアスポーツ全般の可能性として、登山トレッキング以外にもカヌーやマウンテン・バイク、スキー、釣それに水泳などを目的としたツアーの開発や、



▲会議風景

キャンプサイトを明記したトレッキング専用地図の作成など、気軽にアウト・ドアを楽しむ方法が提案された。

また、登山規則の見直しについても、登山者サイドの声を積極的に参考にしていく方針なので、登山隊はデブリーフィングの際には、どんどん意見を述べて欲しいとのことである。言葉の問題があり、口頭での意見が難しい場合には文書でもよい。現在のところ、パキスタンの登山規則はネパールの登山規則を参考に改定されているが、インドや中国の登山規則も参考に、より登山者がパキスタンの山を目指しやすいうようにして欲しいとの声に、具体的な内容の提案を促された。連絡官や高所ポーターそれにガイド対象のガイダンスや訓練の必要性など、積極的な話題が出た。

中国登山協会副主席顔金安氏からは、カラコルムやヒマラヤに於ける国境を超えたレスキュー体制の提案がなされた。

スペシャル・ゲストの、ヒマラヤやカラコルムでの冬期登山を精力的に行っているポーランドの登山家アンドゥジェイ・ザヴァダ氏は、氏の実践してきた一連の冬期登山についてのスピーチとスライドショーを行い、初めて目にする自国の美しくも厳しい山岳地帯の冬の姿に、会場のあちこちからため息がもれた。ザヴァダ氏は、装備の進歩

などでかつては難しかった山も比較的容易に登られるようになった今日、困難な登山を目指す登山者が増えることを期待する、頂上も重要な目的だがプロセスは最も重要だ、と言葉を結んだ。

また、ザヴァダ氏の冬期ナンガ・パルパット隊のベース・キャンプまで冬期トレッキング隊を率いたモニカ・ロゴジンスカさんは、パキスタンの冬期トレッキングの可能性と素晴らしさをスライドショーで説明した。

我々日本人登山者にもなじみの深いナジール・ザビル氏は、豊富なスライドを用いて、パキスタンの最高峰K2の登山史とルート紹介を行った。

芝生には北西辺境州の手工芸品やエージェントの展示コーナーが設けられ、会議の休憩時には、ホテルの側壁を利用して、パキスタン山岳会々員によるユマールリングや懸垂下降のデモンストレーションが行われ、参加者やホテルの宿泊客の喝采を浴びていた。

ところで、パキスタン国内の観光事業促進の上で、パキスタンが直面している主な問題は、西側諸国のオブザーバーの偏見のために生じている歪められたイメージが根底にあると云う。イギリスからの参加者でオクスフォード・ブルックス大学のスーザン・ローフ博士によると、アメリカ合衆国、イギリスそしてカナダの三カ国では、保安上の理由から訪パキスタン自粛勧告が出されているとコメントした。

パキスタンでは外貨獲得のために、これまで政府にとってはさほどプライオリティのなかった山岳地帯の観光事業にここ数年来力を注いできていたが、昨年8月のアメリカ政府によるアフガニスタンへのミサイル攻撃は、北西辺境州やノーザン



▲A.ザヴァダ氏とM.ロゴジンスカさん

エリア及びパローチスタンから旅行客を遠ざける原因となり、北西辺境州のホテル業界だけでも週当たり一億ルピーの損害が続いていたという。最近徐々に旅行者数は回復傾向にあるが、前出の三カ国では訪パ自粛勧告が依然として続いているとローフ博士は言う。この三カ国への訪パ自粛勧告撤廃の署名運動が会議終了後なされた。

ところで、我々大多数の日本人にとっても、文化的な遙かに異なるイスラムの国に対しては、マイナーなイメージがあるのではないだろうか……一夫多妻がみとめられる国、女性が一人で出歩けない国、禁酒の国、復讐が容認される国、不衛生的な国、登山に於いてはポータートラブルの多い国等々。しかし、それには我々外国人には計り知ることのできぬ彼等なりの歴史的な理由はあるであろう。それらを全面的に肯定しないにしても、自分たちの価値観だけでそれらの問題を安易に否定したくない。

前出在イスラマバード15年の大住さんの言葉が心に滲みる。「危険な場所や人は世界中どこにでも存在します。それを認識した上で、自らの責任で自らの行動をすべきではないでしょうか。誰が何を言おうとも、私はパキスタンの美しい風景と雄大なカラコルムやヒマラヤそしてヒンドゥ・クシュの山々、素朴で心暖かい人々が好きです」

現在、外国人はおろか一般人の立入りも許されないバーラー・ヒッサールでの晩餐会、そして海外からの招待客の航空運賃と会議開催中の滞在費を国家予算で賄ったパキスタン政府の決断に、此の度の国際山岳観光会議の成果によせる期待の大きさを見る思いがした。

「2001年パキスタン観光年」の構想があると云う。その実現と成功を祈念して止まない。

(記：寺沢 玲子)

パキスタン登山規則他関連情報

日バ旅行社が、自社のクライアントの資料として「パキスタン登山の手引」を作成してまもなく、パキスタン観光省は2000年からの登山規則の一部改訂や登山料の値上げを発表した。その資料は、2月に行われた日本山岳協会海外登山研究会で日バ旅行社のご好意で邦訳配布されたが、その後更

に一部改訂された。また、在日パキスタン大使館ビザセクションのビザ受付及び受領時間も若干変更しているため、ビザ申請する場合事前に確認した方がよい。

ベシヤワールで開催された国際山岳会議で配布された、2000年からの登山規則集並びにトレッキング規則集(1994.4.15作成)の中から、主な変更事項をここに掲載しておく。この両規則集は入手可能であるため、希望者は直接パキスタン政府観光局若しくは在日パキスタン大使館に問い合わせを欲しい(住所は下記に掲載)。日パ旅行社では、この新規則の日本語版を現在作成中とのこと。なお、国際山岳会議の席上、今後も追加の変更事項が生じる可能性があることを示唆されたため、来年度以降の計画をしている隊は、事前に観光省やエージェント若しくは在日パキスタン大使館の登山セクションに確認することが望ましい。

1) 登山料

標高	登山料	追加料金/人
K 2 (8611m)	US\$ 12000	US\$ 3000
8001~8500m	9000	3000
7501~8000m	4000	1000
7001~7500m	2500	500
6000~7000m	1500	300

※上記左は7名までの登山料。

2) 保険による補償金額

連絡官	30万ルピー
ガイド、コック、高所ポーター	20万ルピー
低所ポーター	10万ルピー

1999年パキスタン日本隊一覧 - 6km以上 -

山名	標高	隊名	隊長名	期間	人数
K 2	8611	G登攀クラブ	藤原拓夫	5/14~90日	8
G I	8068	江北山の会	細田一郎	7/15~60日	1
ナンガ・バルバット	8125	労山全国連盟	近藤和美	6/4~90日	6
ナンガ・バルバット	8125	福岡登高会	大石義豊	6/14~7/30	9
ラトック V	6190	鉄腕山岳会	大宮 求	7/16~8/29	6
マッシュブルム	7821	富 山	カワハタサトシ	6/9~60日	10
マッシュブルム	7821	福岡山の会	稲永 篤	7/10~60日	4
キンヤン・キッシュ	7852	同人パハール	飛田和夫	6/4~8/22	3
モムヒル・サル	7343	めっこ山岳会	武田澄人	7/15~8/28	5
スパンティーク	7027	バーバリアン	野沢井歩	7/15~60日	6
サカル・サル	6272	横須賀山岳会	宮沢 章	7/20~8/28	6
コズ・サル	6677	仙台一高	ヤマガタイチロウ	7/11~60日	6

3) 連絡官の都市滞在費

イスラマバード/ラワルピンディ

US\$ 30/日

地方都市(スカルド、ギルギット等)

US\$ 15/日

4) トレッキング料

制限エリア(22コース) US\$ 50/人/コース

オープンエリア(36コース)

US\$ 20/人/コース

5) 登山ビザ

◎必要書類

大使館備付けの申請用紙(両面コピー可)×1

パスポートサイズの顔写真×2

パスポート(残存期間6ヵ月以上)

登山許可書のコピー×1

メンバーリスト×1

ステッカー代百円/人

※ビザセクション(1999.5.20現在)

月~金 10:00~12:00 ビザ受付

16:00~16:30 ビザ受領

土・日並びに両国祝祭日は休館

水はビザセクションは受付・受領共にしない。

※在日パキスタン大使館

〒106-0046 東京都港区元麻布2-14-9

☎03-3454-4861~4

※Mountaineering rules and regulations(登山規則集)、Trekking rules and regulations(トレッキング規則集)申込みは下記のいずれかへ。

1.Sports & Tourism Division.

College Road, Sector F-7/2,

Islamabad, PAKISUTAN

パキスタンの高峰数

標高区分	カラコルム	ヒンドク・クシュ	ヒマラヤ	計
8000m以上	4	-	1	5
7501~7999	29	3	2	34
7001~7500	102	20	1	123
6501~7000	143	40	4	187
6001~6500	220	126	5	351
計	498	189	13	700

※数字は観光省発表による

イエティの存在を追う(Ⅲ)

1994年 イエティ捜索隊リポート

——ダウラギリ山群コーナボン・コーラ周辺における
イエティ捜索活動概要と結果(その2)——

(岩 穴 の 観 察)

8月28日、Cポイント(4,600m)の古山、高橋、木野カメラマンは、南東稜末端方面の捜索に向かう。4,790mのピークを越し、さらに岩稜を南下した4,600m地点にて不可解な岩穴を発見する。Cポイントより約40分、南東稜から南側(タレジャ・コーラ)に派生する支稜を約60m降りた地点にこの岩穴があった。ガスで視界不良のため支稜に入り込み、下方から見上げることにより偶然に発見した。地形的に稜線からは確認できない位置である。

南側の谷に張り出た庇(ひさし)状の岩と、その下の小さなテラスとの空間を利用し、大小9枚のプレート状の岩を立てかけて作った簡単な岩小屋であり、明らかに自然の岩穴とは違っていた。入口は、岩板を立てかけた三角形の隙間で南の谷に面している。

我々が入るには少々狭く、内部を撮影する際、上半身を入れる時に、左側のプレート岩を動かし、間口を広げなければならなかった。岩穴内部の状態は、底部の左右が上がった船底型である。サイズは、天井までの最大部分で約80cm、左右幅約140cm、奥行き70~80cmであるが、変形しているため、実際には狭い容量で、小柄な人間が無理をすれば入れる程度である。船形の底部に少量の枯れ草が敷かれたようにおいてある。これは風によって吹き込んだ可能性もあるが、その枯れ草は圧縮された痕跡があり、同時に穴の中には強い獣臭があった。どんな種類の動物の臭いかは判断できないが、ヒトのものでないことは確かである。また、圧縮された枯れ草の状態から推測するとこの動物はかなり重量のあるものと思われる。毛、フンなどの

残留物を調べたが、採集することはできなかった。岩穴外部、入口の真下2、3歩の礫部分には同じところをしばしば踏んでいった痕跡がある。蹄行性の類とは異なるかなりの重さの獣と推測される。

岩穴の左側約5mの場所にも庇状の岩とテラスがある。このテラス上の風化した岩くずも踏まれ、圧縮された跡があり、同じ獣が立ち寄ったものと考えられる。4,600mの標高は、ヒマラヤにおいては高所とはいえないが、この南東稜は地形的にも急峻な岩稜であり、人間が気軽に登ってくる場所ではない。このような状況から推測すれば、この岩穴を使用しているものは、ヒト以外の獣と考えるべきであろう。

この高度を棲息圏としている生物は、種類も数も意外に多い草食獣のカモシカの類、捕食獣ではユキヒョウ、さらに3,500m付近で目撃されるヒマラヤグマも登る可能性がある。そのほか、ナキウサギ、オコジョ、鳥類では雷鳥の類、キジ等も多く観察される。これらの中で生態的に岩穴をねぐらとする大型獣は、場所的に考えると、ユキヒョウの可能性がもっとも高く、次いでクマと考えられる。しかし、この岩穴は明らかに加工されたものであり、手を使わなければならないものではない。4足獣が作ることは不可能である。では製作者は誰かということになるが、常識的に考えて人間のほかにありえない。サイズに問題はあがるが、人間が何らかの目的で作ったが(例えば、猟師が待ち伏せなどのために)現在はユキヒョウなどの獣が棲みかとして使用しているものと思うのが妥当であろう。この岩穴とイエティを結びつけて考えることは容易であるが、安易で都合の良い仮説は現

実的な搜索の方向を誤らせる。例えそうであったとしても、現時点ではイエティと結びつける証拠は何も確認できていない。

《岩穴の自動撮影装置のセット状況》

この岩穴に出入りする獣の正体を確認すべく、2日後（8月29日）に2台の自動撮影装置をセットした。センサー作動のスチール・カメラ（ニコン/オートドライブ機能・広角レンズ・フラッシュ）、さらに外部には出入口に接近したものを狙って、ソニーの自動8m/mビデオを設置。これは後に、夜間の撮影にも対応できるよう、赤外線ビデオ・カメラに変更した。

- ◇スチール・カメラ 8月29日～9月1日
- ◇8m/mビデオ・カメラ 8月29日～9月1日
- ◇ " (赤外線) 9月3日～9月9日

《カメラの作動状況》

9月1日

点検時、スチール・カメラは3コマ作動後、バッテリーが尽きていた。（この際、岩穴内壁に固定しておいたカメラは引き落とされていた）その後

回収し、他にセットする。8m/mビデオ・カメラは、テープは最後まで回りきっていたが、何も写っておらず、セット時のミスと考えられる。

9月9日

赤外線8m/mビデオ・カメラは夜間に2分間作動したものの、画像としては判断不能。回収後、他の地点にセットし直したが、同様に作動はするも、像としては判断不可能。使用方法のミスも考えられるが、原因は不明である。

岩穴にセットした自動撮影装置の作動状況は上記の通りであるが、具体的な変化としては岩穴内壁に固定しておいた自動カメラが何者かにより下に落とされていた。さらに、固定する際、岩に引っかけておいたストラップ・バンドの“へり”がボロボロになる損傷を受けている。現場を確認した村上は、「何か強い力で引っ張られ、岩角との摩擦でこの損傷が生じたようだ」と報告している。

カメラの右側にセットしたセンサーは、そのままの状態であり、カメラを落とした犯人を感知し、カメラが作動、3コマが撮影された。

帰国後、このフィルムをフジテレビで現像した結果、3コマとも岩穴の入口部分から内部に向けたアングルとなっており、肝心の犯人の姿は映っていない。しかし、写っていた岩穴内部の写



◀ タレジャ・コーラ側支稜の岩穴

真は3枚とも大きくアングルの異なるものである。写真から判断すると、カメラの位置は岩穴の入口にあり、内部を向いている。岩にあたるフラッシュの反射状態から、少し上向きで撮影されている。内1枚の端に一部空が写っており、作動時刻は朝か夕刻、または曇天の日中と思われる。

《犯人の推測》

3枚の写真から推測・判断すると、犯人はセンサーが反応する位置ではあるが、レンズの死角にいた。具体的にはカメラの背後、岩穴の入口付近ということになる。カメラには24m/mの広角レンズを使用しており、3枚の写真のアングルは、偶然に岩穴の内部を左側、正面、右側とその大部分を押さえている。狭い岩穴内であり、ある程度の大きさの獣であれば体の一部分くらい写るはずである。作動するだけならばナキウサギ等の小動物が侵入した結果とも考えられるが、カメラに対してのアクションから判断すれば、その線は弱い。オートドライブ機構のかなり重量のあるカメラを、更に防水対策としてビニール袋でくるみ、固定したものを引き落とし、その後もカメラに触れ、位置を動かしていることを考えると、能力的にナキウサギの仕業とは考えられない。また、最初この岩穴に残っていた強い獣臭と大型獣の入っていた痕跡等から、この岩穴はおそらく捕食獣の棲みかと思われる。そこにその獣の餌となる小動物がこのこ入るであろうか。犯人はやはり、この岩穴を棲みかとしていた獣であろう。自分の棲みかに見慣れぬものがあることに興奮した結果と想像する。

しかし、どうにも理解できぬことがある。岩穴の壁にセットしたカメラをどのように引き落したのか。少なくとも入口から侵入したとすれば、カメラに触れる前に撮影されてしまう。3枚の写真は、どれも落とされた後に作動したものである。その前のコマは、セットの際に入口で手をかざし作動テストをしたもので、正常の位置から撮影されている。入口から侵入すれば、どんな小動物でも同様なアングルで何者かの姿が写るわけである。カメラを作動させずに落とすためには、センサー

▼岩穴の周辺



の死角からやるしかない。その位置はカメラとセンサーをセットした背後からである。そこは数枚のプレート岩を立てかけた隙間があり、外側からカメラを落とすことは不可能ではない。その後入口に回り、落としたカメラを更に動かしているとしか考えられない。入口に回り込んだ時点でセンサーが感知し、3コマ撮影したわけだが、またもレンズの死角にいた。すべてが偶然の結果とはいえ、実にうまく立ち回ったというのが私の想像するところである。

犯人像であるが、状況からみて人間ではないことは確かだが、他に正体を断定する証拠もない。常識的に考えて、この付近の環境を棲息圏とするある程度以上の大きさの獣、ヤマネコやユキヒョウ等の可能性が高いが、後に同じ南東稜で発見した正体不明の足跡の例もあり、未知の獣の線もまた否定できない。

《なぜ自動撮影に失敗したか》

この岩屋に動物が出入りしている事は確実である。そして我々にはハイテクの撮影機材がある。失敗するはずがない条件がそろっていたのである。2台のカメラが待ち受ける岩屋にその獣はやはり帰ってきた。ここまでは我々の思わく通り事が運んでいた。

少なくともスチール・カメラの3コマ作動した中にその獣の姿があると考えていた。

この完敗の原因はどこにあるか、単なる偶然の結果とみることもできる。しかしそれだけではない、自動カメラの取扱いが不慣れということもあ

るが、それ以上に野生動物の用心深さを甘くみたこと、具体的にはカメラをセットする際、入口部分を広げたり、そのまわりを踏み荒してしまったこと、さらにその獣の棲家の内部に直接カメラをセットするなどロコツで遠慮のないふるまいをした。これでは獣が警戒心をもつのは当然かも知れぬ。

もちろん獣はカメラがなんであるか知らない。しかしその機材は人間が関与していることは判断できると思う。棲家のまわりの変化、機材の臭い、これだけで充分な警戒心をもつことになる。その

《タレジャ・コーラのシルエット》

8月30日 8時、Cポイントより村上、古山、高橋と木野カメラマンが、南東稜末端方向に捜索に向かう。前日の岩穴には立ち寄らず、さらに30分余り南下を続けると、南東稜の大きなピーク・マルバス(4,625m)とのコルを見下ろす地点に到着する。

10時、ここは右側眼下にタレジャ側の広大な草原台地を観察できる。台地は標高約3,500m~4,000mの間に広がる起伏した高所草原台地であり、この観察地の眼下約1kmの草原に屋根のない放牧カルカが確認される。さらに南東2.5km、マルバスの南西尾根の台地にも二つの池を持った放牧地が見える。Cポイント真下にあるカルカと合わせ、この台地には観察されるだけで3カ所の放牧地がある。これらの放牧作業は8月30日現在時点ではすべて無人であり、広大な台地に動くものはなく静まり返った状態である。コーナボン側での放牧の最後まで残ったキルティが水牛とともに撤収下山した日が8月24日である。タレジャ側の放牧地は4,000mと高いため、同じかそれ以前に下山したと思われる。いずれにしろ、タレジャ・コーラ側の奥地も予想以上に人間くさい時期があることがわかった。

この地点で観察を続け、30分余り経過したとき、台地がタレジャ・コーラ源頭に切れ落ちる地点に黒い動くものを発見する。直線距離約2kmの眼下である。台地の西側にあたるタレジャ・コーラのゴルジュから台地上に上ってきた後、緩やかに起伏する草尾根を越し、ふたたびタレジャの谷に消

危険を承知の上だいたんにも近づき棲家の内部にセットしたカメラを引落した。しかも姿を撮らせることなく、ともすると自からセットした自動カメラの被写体になってしまう我々とくらべなんと利口なことか。

結論として、獣は用心深く、我々は不用心過ぎたということである。

逃がした魚は大きい、こうなると我々をコケにした相手の正体を是非とも知りたい。もし再び相まみえることがあれば、岩屋の位置を知る我に利あり、である。

えてしまった。その間5~6分。発見時、クマの様に思われたが、双眼鏡での観察では色はこげ茶色である。やがてくぼ地から尾根の背に移動し、全身が現れるとそれは直立歩行しており、人間のようにも思われた。全身こげ茶色で人間にしては大きいと感じたが、その付近には比較・対象する物がなく、距離も我々の判断よりは近い可能性もあり、より大きく見えたのかもしれない。2本足で移動するこげ茶色のシルエット、双眼鏡とTVカメラでの観察ではそれ以上の解明は不可能であった。

常識的に考えると、直立2足歩行する哺乳類はヒトだけである。しかし、イエティといわれる獣も直立2足歩行をし、全身赤茶色の動物とされている。そして我々はそのイエティを捜すことを目的としてこの地に来ているわけである。目撃地点や時期的に考えて、ヒトがいる可能性は低い。それだけに、そのシルエットはイエティを連想するに充分であった。ヒトかイエティかは、その時点では断定するわけにはいかなかった。まもなく、タレジャ・コーラにもガスが発生し、視界は閉ざされた。

このまま未確認の状態では後に過った解釈や都合のいい判定をする元となることは想像に難しく、何よりも事実を知る必要があるため、後日改めて徹底的な捜索を行なう事とする。

9月1日、村上、木野カメラマン、シェルパの3名は、Cポイントよりタレジャ・コーラの調査に出発する。7時30分、途中岩穴に寄り、カメラ

の点検をする。南東稜の南側、タレジャ・コーラは今回の捜索活動の許可範囲外である。過去においても外国人の入った記録はなく、その点からも未知の谷である。その谷を下降し、キャンプを設営しての捜索行動は違法行為である。しかし、このままヒトかイエティかの正体追求もせず、未確認生物という状況で終わっては我々の目的に反する。極力速やかに調査をし、結論を出すべく、7時に出発する。タレジャ側に下降すると、コーナボン側のBCやBポイントに交信が届かぬため、古山がCポイントに残り、中継を担当することになる。3名は前日の観察地点から、マルバスのコルに下り、コルを右に下降し、タレジャ・コーラに入る。10時50分、屋根のない無人のカルカに到着、さらに緩やかな草原を下降し、前日の人影を目撃した地点に到着する。そこは草丈20~30cmの草原であり、その中に新しい踏跡を確認した。さらに付近の観察を続けたところ、石をひとつ立ててあるものを確認する。このような石を立てる行為は、現地の人たちが不明瞭な道の目印として行なうものである。それが新しいか、古いかは別として、先日のこげ茶のシルエットはヒトの可能性

▼草原地末端の動く黒点



が高くなった。午後よりガスの発生で視界がきかなくなり、キャンプの設営に入る。

9月2日、タレジャ・チームは昨日に続いて付近の再調査を行ない、姿の見えなくなった地点より約50m下降したところでサイズ23cmの裸足の足跡をひとつ確認した。目印用に立ててあった石、ハダシの足跡、さらに近くに無人ではあるが、カルカも残っている点から判断し、直立2足歩行のシルエットは人間であるという結論を出し、タレジャ・コーラの捜索を打ち切る。

（ 未 知 の 足 跡 ）

《足跡の発見と状況》

9月16日 8時にCポイントを発ち、南東稜上部を捜索中の村上及び木野カメラマンから9時45分、「人間の裸足に似た足跡を発見した」との交信が入る。場所はこれまで調査した最高所よりさらに200m程先の標高4,750m地点である。現場は細い稜線であり、風化岩が砂状化した部分であるため、明瞭にプリントされているとのこと。サイズは約18cm、左足である。この足跡のさらに1m上にも同様の足跡を確認する。こちらは比較的荒い土質部分のため、鮮明度は低いが、これも左足である。右足跡の痕跡が残されるはずの位置には岩があり、その上を踏んだと思われ、残っていない。

足跡は往々にして判定が困難であるものが多く、結果的に誤認が生じやすい。より正確な判断をす

るためには、同様の足跡を他に5~6個は確認する必要がある。引き続き調査を試みるが、付近は岩稜という条件でもあり、新たな発見はなかった。その上、この先は地形的に登攀装備の用意がなくては困難なルートとなっており、これ以上は進むことはできない。この日はTVカメラとスチールで足跡を撮影し、下降する。

9月17日、足跡の再調査と新たな痕跡の発見のため、Cポイントの全員（田中・村上・古山・木野・高橋）で久しぶりの晴天下を南東稜上部に向かう。登山隊C1跡を過ぎたころより、シカ類の蹄の足跡やフンが多く確認される。岩峰をコーナボン側よりトラバースで登る付近では、登山道と見間違えようよく踏まれた獣道となっている。問題の足跡は、トラバースを終わり、リッジ上に登り直したところから3~4m上部に残されていた。傾斜度約15度の稜線上を上方に向かっていて、一昨日まで6日間降り続いた雨で、柔らかくなった

土質状態のときに踏んだものと推測され、全体的に約1.5cm沈みこんでいた。かなり強い雨が続いたにもかかわらず、足跡の輪郭に崩れないことは意外に新しいものと考えられる。

《特徴》

この足跡は、長さ18cm、形もサイズも人間のこどもの足跡に非常に似ている。土踏まず部分のアーチ状も確認される。手で触れてみると、明らかにアーチ状の盛り上がりはあるものの、その盛り上がりは少なく、偏平足気味である。踵の形は丸く、猿や類人猿のように細い踵ではない。全体のバランスとしては人間並みである。さらに猿類の特徴である、親指の対向性を示す痕跡は認められず、この点からもヒト的である。指の部分は少し粗い粒の土質のため、各指の状態は区別できないが、全体の形はわかる。親指は人間同様に前方に並んでいるが、ツメ跡は無いと判断できる。足跡の形としては、ヒトの足跡と比較してもスマートな部類である。

この二つの足跡は、傾斜約15度の稜を上方に移動したと思われる配置となっている。その足運びの状況から判断すると、2足歩行をした可能性がある。さらに、斜面に対しての踏み込みの圧がフラットにピタリとプリントされている。すなわち、我々人間がこのような砂地上の斜面を登った場合、最後につま先部分に力が加わり、結果的にその部分が他よりも多少とも深くえぐれた状態となるわけだが、この足跡にはその痕跡が認められず、平均的に押しつけられたようである。この日は新たな足跡を求め、5,100mまで登ったが、岩稜が続き、他に確認することはできず下降する。

観察例が少ないため、必ずしも正確な判断とは言いきれぬが、足跡の特徴としては以上の通りである。

《足跡の推測》

●ヒトか否か

人間の子どもの足跡と極めて似ている現実から、やはりまずヒトのものであるか否かの結論を出さなければならない。そのためには、この周辺の環

境と民族性、住民の生活スタイルを背景として考える必要がある。

この足跡が山麓の集落近くに残されていたならば、間違いなく人間の子供のものとして見てしまうであろう。さらに、発見した地が高地民族であるチベット系住民の住むクーンブやトルボ地方のヤクを放牧する地域であれば、4,750mという高度はヒトの生活領域であり、そこにヒトの足跡が残されていたとしても何ら不思議はないが、こと今回の搜索地であるダウラギリ山群南面のグルジャ・ヒマール南東稜、4,750m地点にあったということにおいて少々事情が異なり、同一の基準で判断できないのである。

同じネパール・ヒマラヤでも、環境的にクーンブやトルボ地方の寒冷高所型に対し、ダウラ・ヒマール南面はモンスーンの影響を強く受ける温暖湿潤型である。

民族的にはタマン族やマガール族が多く、ここでの農耕牧畜形態は、1,800m付近までが水稲、それ以上2,000mラインまでがヒエ及びとうもろこしを主要穀物としており、これ以上の高地には作物といえるものはほとんど作られていない。

家畜は水牛、牛、山羊である。水牛と山羊は夏の間、畑作地より奥地に入り、小規模な放牧が行なわれる。その上限は3,500m付近に広がる草地まで及ぶ。しかし、水牛は本来、温暖の地の動物であり、3,000m以上での放牧は、モンスーン・シーズンでもごく短期間である。

そもそもネパール山地の集落としてはこの辺りの村は比較的低所にある。ミャグディ・コーラ沿いに点在する定住集落の最奥で、もっとも高い地にある村は、標高約2,000mのボガラである。これより奥は、氷河末端近くまで険しい地形のジャングルが続き、放牧小屋以外には無人である。これは地形上の制約と同時に、住民の生活様式が南方系・温暖型であることによる。このような生活スタイルの住民にとっては、南東稜の4,750mという不毛の岩稜は生活圏外の地である。

足跡の現場は、最も近い放牧地からでも1,350mの高度差があり、地形的にも簡単に行けるところではない。まして、モンスーンの悪天候の中を、子どもが裸足で登れるようなところではないので

ある。仮に地元住民が何らかの理由で現場まで行くとしても、我々がBCを建設した8月13日以来、足跡を発見した9月16日の間に少なくともコーナボン側からは登ったものはいない。足跡は最近のものであり、この可能性はない。この足跡をヒトのものとは仮定した場合、考えられることはただひとつに絞られる。それは、我々の知らない間にコーナボン側よりさらに困難で危険度の高い南側のタレジャ・コーラから直接現場に登った人間がいたことになる。獣が通っていることは確かで、人間も命がけて登るつもりがあれば、絶対に不可能ということもできない。

しかし我々は、これらの可能性を考慮してもなお、この足跡はヒト以外のものと考えている。その根拠は、過去にも南東稜でこのような足跡を目撃しており、今回が初めてではないことによる。私（高橋）自身の体験を例に取れば、1971年及び75年の2回、この南東稜経由でダウラギリIV峰を目指す登山隊に参加の折、今回のものと類似した足跡を目撃している。

1971年4月13日、ルート工作中的の隊員、松田・高橋及びシェルパが、今回の現場から100mと離れていない地点で、雪上に残された約20cmの足跡を見ている。この足跡は、南東稜を下りてきたもので、最後はタレジャ・コーラに下降している。しばらくは足跡を逆にたどる形で登ることになった。さらに5月7日には芳野隊長がC2（5,100m）で約15mの距離から、直立した猿でも熊でもないという獣と対面している。この獣は身長150cmくらいで、2本足のままタレジャ側の雪の急斜面を下りていった。この時残された足跡のサイズも約18cm～20cmであった。

1975年9月には、カモシカ同人隊のドクター、今井通子氏と須田隊員及びシェルパがC1（4,650m）近くの雪面上で、子どもの裸足の足跡そっくりという多くの足跡を観察している。この時の写真は紛失してしまったが、その後コーナボン内院で新たに発見したものの写真がある。これはひとまわりサイズが大きいものであったが、ヒトの足型に似ている。

これらの目撃と発見例はいずれも雪面上であり、状況的に判断してヒトの可能性はない。今回発見

した足跡との関連性は、①南東稜であること ②距離的に、4,650m～5,100mの間に集中していること ③特徴として、足跡の形が全体的に小型（約20cm前後）であること ④人間の足跡と極めて似ている、などがあげられる。これらの点から同類の獣の足跡と判断している。

ヒトでないとするれば、動物ということになる。この付近を行動範囲とする獣で、結果としてヒトの足跡そっくりな足型を残すものは、どのような動物か、またはどのような動物のダブル・プリントが考えられるか。さらに異種類の動物の重複プリントならば可能かをも含め、考えなければならぬ。

《生息環境と疑わしき動物》

状況的にヒトの可能性はないということは前に述べたとおりである。したがって、動物の足跡となるわけだが、動物といってもこれまでに数度にわたり雪面上で観察した痕跡は決してナキウサギやオコジョ類の小動物が跳びはねた結果できたものではない。さらに94年捜索時の無雪状態の時に観察した足跡は、少なくとも偶蹄類のダブルプリントではないと断言できる。

ほかにどのような獣の可能性があるかを探っておくことにする。

まず、時期と出没の関係は次のような状況となる。

同種類のものとは判定できるこれらの足跡は、プレ・モンスーン、モンスーン、ポスト・モンスーンにそれぞれ確認されている。冬期には入山した例がなく、不明であるが、4月から10月の間はこの範囲に出没している。

現場の雪の状態は、プレ・モンスーン期には多量の雪があり、実質的に積雪期の状態と同じと思ってよい。モンスーン期は、雪線の後退が進行中であり、5,000m前後の高さでは、雨は雪となる。しかし気温が高く積雪とはならず、また、全体的に雪解けが進む。モンスーン末期に雪線はもっとも後退し、例年であれば5,100m付近まで上昇する。ポスト・モンスーン期は、その年により多少の差はあるが、少量の残雪または無雪状態である。

南東稜4,700m～5,000mにおける動物の行動状況としては、プレ期は雪が多く餌となる植性もないため、カモシカ類の草食性動物の多くはこの時期には3,450m付近から裏山に多く観察される。そのような状況下に例の足跡だけがあることは印象的である。プレ期でも遅くなると稜線上に各種の足跡が見られる。モンスーン期及びポスト・モンスーン期には多くの動物が活動している。もっとも目立つものはカモシカ類の蹄跡であり、ほかにおそらくユキヒョウと思われる指行性の足跡が観察される。そして、これらの足跡とは明らかに異なる、例の足跡も残されている。現時点でいえることは、この足跡の主は、積雪の有無に関係なくこの高度に出没している事実、さらに季節的に上下する雪線とともに、行動域を移動する習性の獣でもなさそうである。

しかし、常時この付近を生活空間としているとはとても考えられない。捕食獣であれ、採食性、雑食性であれ、この高度では餌となるものが十分ではなく、さらに積雪状態では状況はもっと悪くなる。そのため生活拠点とはなりえず、行動範囲の一部と考えるべきである。

ではなぜこの範囲で足跡の発見が続くのか、それなりの理由があると思われる。地形的に獣と登山隊が同じコースを通るか、接近するため、結果的に目につきやすいこともある。登山活動中にも出没すること自体大胆な行動であり、どうしてもこの付近を通ることにこだわっているようにもみえる。コーナボン・コーラとタレジャ・コーラを行き来する越境ポイントの可能性が高い。

以上のような状況下に残される足跡の主は、ダブル・プリントの可能性を含め、ある程度の大きさの足跡を残すコーナボン・コーラおよび、南東稜で生息を確認されており、この基準にあてはまる疑わしき獣としては、

ユキヒョウ…主に南東稜上に痕跡が多い。

コーナボン側斜面では、4,200m以上に出没している。

ヒマラヤグマ…コーナボン・コーラの3,500mで確認する。裏山のブッシュ帯に入る。

ハヌマン・ラングール（ヒマラヤ・ラングール）…3,400mにて約40頭の群れを目撃する。

このほかに、ヤマネコの類やキツネ、3,000m台ではオオカミ等もいるようである。シカおよびカモシカ類は、あらゆる地点で目撃され、足跡も多く観察されている。

《蹠行性歩行》

野生動物の行動には、我々から見ると不自然に思われること、理解し難い行動が多く起こっており、その意味付けや推測をすること自体人間的な発想となってしまふ。人間の価値観や尺度で測ろうとしても通用しないものがあることを自覚しながら、あえて考えてみる。

まずダブルプリントについては、今回発見した足跡が明瞭に残されていただけに、他に可能性を探る余地はほとんどないと思ってよい。ヒト以外で、蹠行性のロコモーションをする、この付近に生息する動物は、ラングール猿とヒマラヤグマである。現場の状況及び、素人知識の範囲内でこれらの獣の習性とつき合わせて推測してみる。

ラングール猿もヒマラヤグマも、コーナボン・コーラの谷間3,400m付近では目撃している。問題はこの2種類の動物が、普段の生息環境と大きく異なる5,000m近い高所に登る習性があるかということである。それも異例、例外的な行動としてではなく、足跡の発見確率からすると、かなり通常的に行動範囲としているものと考えなければならない。

ヒマラヤ・ラングールは、夏の無雪状態であれば、時には4,000m位まで登る可能性はある。しかし、この猿は樹林帯が生息圏であり、テリトリー自体も狭い範囲となっている。森林限界を遠く離れた5,000m近くまで登ることは疑問である。特に積雪期にも足跡がある事実から判断すれば、足跡の主はヒマラヤ・ラングールの可能性はない。ヒマラヤグマも同様で、普通は3,500m以下の樹林帯が生息圏である。地域的な差異はあると思われるが、基本的な習性としては、樹林帯を遠く離れることはない。しかし、クマは時として雪線付近(5,000m)まで登ると言われている。チベットやコンロンのクマがそうであるように生息地域の環境や条件によってはありうることである。

コーナボン・コーラ及び、南東稜におけるヒマラヤグマの場合はどうであろうか。ヒマラヤグマの通常的な生息環境や習性を判断基準にしなければ、急斜面と岩峰の連立する南東稜といえども能力的には登ることはできよう。しかし、この高さでは苔類を餌とするカモシカ、ナキウサギは多いが、クマの常食となる植性はない。クマは雑食性であり、捕食獣としての行動と考えることもできるが、ナキウサギとカモシカでは捕食対象とはなりそうにない。したがって、仮にヒマラヤグマが登るとしても、それは餌場としてではないといえる。

次に、これまで発見した同類と思われる足跡の様子は明らかにリッジを越して登下降している。コーナボン・コーラとタレジャ・コーラを移動する通路と見ることもできる。ヒマラヤグマが5,000m近い稜を越し、隣谷と行き来する可能性はある。クマが稜を越す場合、どのような地点を通るか、さらに彼らは無雪状態、積雪状態に関係なく、決まった獣道を通る習性があるか、この視点から過去に発見した足跡の状況とつき合わせてみる。

足跡の発見される範囲は南東稜の越境コースとしては最も高所で地形的にも険しい地点を選んでいる。具体的にはタレジャ・コーラの源頭部とコーナボン・コーラの源頭が南東稜5,100m地点にせり上がった付近である。

単に隣の谷に移動するだけであれば、4,600m以下にはもっと距離も近く、条件の良い場所を見つけることは可能である。それにもかかわらず4,650~5,100mの範囲内にもみ痕跡を残す理由は分からぬが、この付近にこだわっているようである。また、足跡は稜線に沿って移動もしており多少はこの高所に滞在していると考えられる。

ヒマラヤグマの習性がどのようなものか知らずに断定することはできないが、我々の感覚で判断すれば、南東稜でも足跡の発見される付近は、地形的にも環境的にもヒマラヤグマの生活圏とするには納得できない景観である。さらに、砂地に残った足型の特徴、食事情、出没時期の問題、足跡を発見する頻度、確率から判断すれば、この獣はこの付近を通常的に生活圏としている。このように考えた場合、クマの可能性は低く、足跡の正体を

ヒマラヤグマとするには証拠不十分である。

反対にクマ的な要素もある。正体不明の足跡→イエティ→クマと関連づけた場合次のようになる。

シェルバや現地民の通説として、イエティは午後遅い時刻によく出没すると言われている。目撃情報にもその傾向が表れている。そして熊も黎明薄暮に活発な動きをするようである。このような活動パターンは、他の多くの動物にも通じるものではあるが、蹠行性の足跡を残す獣となればかなり絞り込むことができる。この辺ではヒマラヤグマにその可能性がある。足形は人間に似ているが、熊類の後ろ足で爪跡が消えた時、場合によってはあのようなようになるかもしれない。後ろ足が18cmのサイズをした熊であれば大型のものといえる。比較的良好に発見される足跡に対し、姿の目撃例は極端に少ない事情も、黎明薄暮型の出没が原因かもしれない。その上に出没場所が人里離れた高所であるため、直接遭遇するに至らず、結果的に足跡のみ見ることになる。もしこのような活動パターンであるとすれば今後の捜索方法も再検討が必要である。

現時点で言えることは、この獣は5,000m近くの高所をも生活圏の一部としている蹠行性のロコモーションをする大型動物であり、主に早朝か夕刻の時間帯に動き回るものであるということである。ヒマラヤグマとするには疑問点が多くあり、あくまで推測ではあるが、この地にはヒマラヤグマの他にもう一種類、蹠行性の動物が生息している可能性がある。

《過去に発見された足跡との比較》

－ 2 種類の足跡 －

イエティの足跡として有名な写真、1951年に英国のシプトン氏がメンルン氷河上で発見・撮影したものがある。それは、長さ32cm、幅20cmもある巨大な足跡であった。仮に今回発見した足跡もイエティのものであると考えたと、シプトン氏のものとは明らかに違っている。たんにサイズの違いというだけではなく、形そのものが異なる。幅広で、ワイルドな感じのシプトン氏の写真の足跡が真実であるとすれば、イエティは非常に大きな獣でなければならない。これに対し、今回及び過

去にコーナボン・コーラ（南東稜）で観察したものは、ヒトの足跡と比較してもスマートで、小型のものである。また、この地では3度にわたりイエティと思われる未知の獣が目撃されている。その情報によれば、大きさは身長約150cm程度と報告されており、足跡のサイズともつじつまが合っている。これはつまり、シプトン氏の発見したものと、今回のものとはまったく別種の獣と考えてよいのではないだろうか。いずれにしろ、足跡からのみの推測には限度がある。

現時点で早まった断定をするべきではないが、これまで南東稜で観察した足跡は、4足獣が歩行する際のダブル・プリントの結果できたもの、とかなずけることはできない。このような足型をした獣が存在している、と同時にこの足跡は過去に南東稜で3回目撃されている未知の動物との関連性があるのではないかと考えられる。

《過去の共通する記録》

小型で人間とよく似た足跡として共通する記録は、古くは1925年、A. M. トム・バズイのシッキム・ゼム峡谷で獣の姿を目撃し、同時に足跡を確認したものがあつた。200～300ヤード下手の谷間に変な動物がいるのに気がついた。格好は人間そっくりで、突っ立ったまま歩き回る獣。雪面に残された足跡を調べた結果、人間の足跡によく似ていた。ただ長さは6～7インチしかなかった。5本の指と、足裏の前の方は、明瞭に雪の上に残っていたが、かかと跡は、かすかに見える程度であつた。

1954年1月、英国デイリー・メール雪男探検隊の場合は、標高14,000フィートの雪面に残されたものであつた。一つ一つの足型は、ちょうど小さな人間の足型と同じ位の大きさで4～5日前のものと思われる。指の跡は見当たらないが、形は非常に鮮明で、その輪郭はまるで靴下をはいたため、指の区別がつかなくなった人間の小さ足跡のように見える。足型の平均長さは約10インチ、最大幅5インチ、かかと幅3インチで、この種のものは他にも多く発見している。

このデイリー・メール隊は、雪男捜索としては

もっとも本格的に取り組んだ隊である。彼らはこの足跡をイエティのものであろうと判定しながら、どうした訳か、結果的にそれほど重要視しなかつた。おそらくシプトンの撮影したものと同じ足跡を発見できなかったためと考えられる。彼らはシプトンの撮影した巨大で指も鮮明な足跡にこだわっており、満足しなかつたのである。彼ら自身、イエティとは総称であり、この中には大型のズーティと小型のミィティといわれる2種類があるといっている。また、大型種の方は、チベット産の赤熊であろうとほぼ確認している。

しかし、問題は小型のミィティの方であり、これは人間を連想させる獣であると指摘している。この考えに立てば、彼らの調査には矛盾がある。シプトンの発見したものは決して小型のミィティの足跡とはいえず、むしろ上記の足跡こそ問題にすべきであつた。

《最後に気になることとして》

我々は、イエティ＝類人猿の類、との仮説のもとに捜索を行なつたが、結果として、こと足跡に関しては現生の類人猿や猿の特徴は認められず、むしろヒト的であることがわかつた。このような点から判断すれば、イエティ＝類人猿としても、それはよほど特殊化したものと考えられる。

さらに今回の調査及び過去にこの周辺で観察された足跡の状況からすると、この獣は2足歩行をした可能性がある。

飛躍した考えをすれば、これらの足跡から連想されるものは、タンザニアのライトリ遺跡出土の猿人（オウストラロピテクス）の足跡化石であり、サイズも形もよく似ている点が興味深い。

これまでも、その獣が直立2足歩行をしていたという情報がある。しかし、あいまいな点もあり、現時点で直立2足歩行にこだわると我々の思考では手に負えなくなる。

（文責：高橋好輝）

ガンカー峰とリャンカン峰を考える

山森 欣一

P16にて速報のとおり、中国のリャンカン・カンリ(7,534m)を目指した登山隊は、初登頂に成功した。しかし、当初この計画は、ガンカル・プンスム(7,570m)を目指すものであった。

日本山岳会主催によるガンカル・プンスム峰計画は、中国側の許可を得て昨秋偵察も終えていた。それが一転して、ガンカル・プンスム計画は延期となり、リャンカン・カンリ計画は、日本山岳会を離れ、一登山隊として実行されたのである。

ガンカル計画の延期については、同隊実行委員長の大森薫雄氏が、日本山岳会「山」647号誌上でその経緯について報告を行っているので参照されたい。また、吉永英明氏の「南側からの視点—ブータン・ヒマラヤ、中国・ブータン国境について—」と題した解説記事も同号に掲載されているので参照されたい。

腑に落ちないのは、大森実行委員長の報告の中で披露されている外務省からの照会文書(本年2月12日付)の中味である。この文書は、在インド・ブータン大使館より、在インド日本大使館へ宛てたもの。その全文を引用すると、

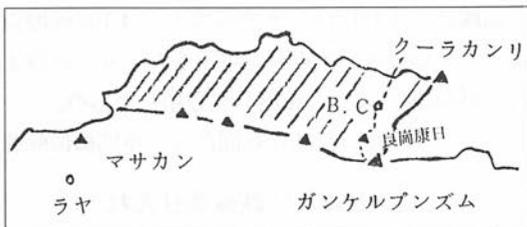
[ガンカー・プンスム峰はブータンにおいては神の住処として信仰の対象となっており、①ブータン政府はこれまで何人に対しても同山への登頂を許可してこなかった。たとえ中国側より同山への登頂を開始したとしても、②頂上を極めるためにはブータン側領土を通過せざるを得ず、仮に日本の登山隊がブータン政府の忠告を無視して登頂を行った場合、ブータンにおける対日感情に悪影響を与えかねない。本件問題はウォンチェック国王の知るところとなっており、同国王も心を痛めら

れておられる]

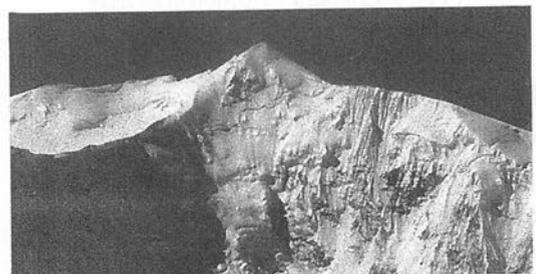
①については、全世界の岳人が承知しているように、インドとブータン合同隊、H A J、アメリカ、オーストリア、イギリス各隊が、ブータン政府の正式許可を得て本峰とその周辺で登山活動を行っている。このような事実を把握していないでこのような文書が出るものであろうか。

②でいうブータン側領土とは、具体的にどこをさすのであろうか。国境稜線上は、ここでいう領土には含まれない筈である。そうすると吉永氏の解説記事の図の斜線部分(ブータン側からみれば歴史的なブータン領と吉永氏は解説)を指していると解することになる。しかし、これでは、改めて中国側が許可し初登頂に成功したリャンカン・カンリ計画に対しても、ブータン政府は、抗議しなければならない筈である。それともリャンカン・カンリは「信仰の対象」ではなかったから目をつぶったのであろうか。さらに、ガンカル・プンスム峰に中国側からトライするに当たって仮に吉永氏が提案する北東側から接近するとして、ブータン側に配慮しなければならないのであろうか。

国境にある山々、インドとネパールのトゥインズ、中国とブータンのチョモラーリ、中国とネパールのチョー・アウイ等々の登山の歴史を見れば歴然とする。結局のところ今回の争点は、吉永氏の指摘するように「聖山」問題ではなく、国境問題+ α であると言えよう。何故なら単なる国境問題であるならリャンカン・カンリ登山も実現していない筈である。いずれにしても α が見えなくて問題は不透明のまま残されることになりそうだ。



▲山647号、吉永氏解説の図



▲リャンカン・カンリ峰(同隊計画書より)

地域ニュース

《ネパール》

野口健がサガルマータに登頂

昨年に引き続きサガルマータ(8,848m)に挑戦していた野口健(25)は、5月13日南東稜からの登頂に成功した。

小西浩文がローツェに登頂

ローツェ(8,516m)の通常ルートに挑戦していた小西浩文(37)と銅谷実(31)の2名が5月22日午後3時登頂に成功した。これにより小西は、シシャパンマC(8,008m)、ブロード・ピーク(8,051m)、ガッシャーブルムII(8,035m)、チョー・オユー(8,201m)、ダウラギリI(8,167m)、ガッシャーブルムI(8,008m)に次いで、7つ目の8千メートル峰登頂となった。(14座では6つ目)

エヴェレスト最高齢登頂新記録達成

ネパール観光省の発表によると、今春南東稜から登頂に成功したグルジアのサルキソフ氏(1938年12月2日生)が5月12日登頂し、従来の最高齢登頂記録である60才と160日を1日更新する記録となった。

12歳が6,000m峰に登頂

前号トピックスで紹介した庄田さとの君(12)が4月29日、コンデ・リ(クワンデ・6,187m)の登頂に成功した。日本人としては、ヒマラヤ高峰の最年少記録である。

HAJ古原顧問が6,000mに到達

HAJの古原和美顧問(76)は、今春クーンブ山群のギャチュン・カンBC近くにあるカンチョウ(6,048m)に挑戦し、登頂はならなかったものの6,000mラインに到達した。この記録は、日本人のヒマラヤ到達高度としては、おそらく最高齢になるものと思われる。

1999年春・ネパール速報!

今春も世界最高峰は大量の登頂者を迎えている。5月5日に20人が頂に立ったのを皮切りに翌日は3名。12日にはネパール側10名。中国側から3名。13日にはネパール側から21名が頂に立った模様だ。ただし、12日に北稜から登ったウクライナ隊3名のうち2名が帰路ビバーク。1名は救助されたが1名行方不明。彼らが最終キャンプから上にロープを張らなかったために、北稜を後続しようとした他隊が登頂できずにいる。南側から13日に登頂した英国人M・マシューズ(22)は下降中に死亡した。

5月12日に韓国のパク・ヨンセク(35)は11座目の8千メートル峰、カンチェンジュンガ(8,586m)に南西面からシェルパ2人と共に登頂した。

ローツェ(8,516m)に挑んでいたチェコ隊は西面から12・13日に5名が登頂。マカルー(8,463m)、ダウラギリI峰(8,167m)、マナスル(8,163m)でも登頂者を出している。アンナプルナI峰(8,091m)では北面からスペイン=韓国の合同隊が挑み隊員6名とシェルパ2名が登頂。下降中に隊員シェルパ各1名が死亡した。

《中国》

リャンカン・カンリ初登頂

ブータンとの国境稜線上にあるガンカル・プンスム(7,570m)の北北西約2.2kmにあるリャンカン・カンリ(7,534m)に挑んでいた登山隊(伊丹紹泰隊長(49)ら11名)は、5月9日に鈴木清彦(42)、角谷道弘(35)、竹内洋岳(28)、高橋和弘(25)、加藤慶信(23)の5名が初登頂に成功した。翌日にも中村進(53)、山本篤(36)、高橋純一(50)、小林尚礼(30)、佐藤大輔(29)の5名も登頂した。

同隊は、4月18日ラサを出発し、4,750m地点にBCを建設後、ナムサン氷河をたどり、北稜上の6,900m地点にACを出して登頂したものの。

(1999.5.13 読売新聞から) ※別稿に解説

カシュガルに鉄道乗り入れ

5月7日付の中国各紙によると、新疆ウイグル

自治区の天山山脈南ろくを走る南疆鉄道が6日完成した。シルクロードの大動脈・蘭新鉄道のトルファンから枝分かれし、カシュガルまで1451kmを結ぶ。コルラまで476kmは開通していたが、1996年秋から60億元（約900億円）で残り部分を建設していた。（1999.5.8 朝日新聞より、図も）

トピックス

マロリーの遺体発見

今から75年前の1924年6月8日、イギリスの第3次エヴェレスト登山隊のマロリーとアーヴィンは、頂上攻撃のため第6キャンプ（8,170m）を出発し頂上攻撃に向かったまま行方不明となった。

1933年の第4次隊の第6キャンプは、8,350mに作られた。5月30日にキャンプを出発したウェイジャーとウィン・ハリスは、ファースト・ステップから約250ヤードの地点でウィリッシュのピッケルを発見した。その後このピッケルはシャフトに刻まれたマークから、アーヴィンのものであることが確認された。

1999年5月5日の各紙は、一斉に「マロリーの遺体発見」のニュースを報道した。それによればアメリカのシアトルに本部を置く「マロリー&アーヴィン捜索隊」が、8,290m付近を広範囲に捜索した結果、マロリーの遺体を発見した。決め手は、遺体の衣類に「G.Mallory」と縫い取りがあり、胸には妻のルースさんからの手紙が傷まらずに残っていたからだと言う。

尚、同登山隊は、1979年秋、チョモランマの偵察時に王洪宝氏から「8,100m付近に英国人の死体がある」と聞いた長谷川良典氏から情報を得た。

チョモランマ頂上で聖火を採火

中国で8月24日開催予定の「民族大運動会」で使用する「聖火」をチョモランマの頂上で採火すべく、登山隊が入山した。

「8千メートル峰14座」登頂を目指す、チベット登山隊は、今夏チョゴリ（K2 8,611m）を予定していたが、北京とラサで開催予定の「民族大運動会」のための聖火をチョモランマ頂上で採火

すると云う計画を実現するために鋒先をチョゴリからチョモランマに替えたもの。（同登山隊には、女性のグイサンとジジも参加している。）尚、チョモランマも「14座登頂」の一環となる。

HAJ新体制スタート

5月29日開催された日本ヒマラヤ協会定時会員総会にて永い間HAJの活動の中心となり会をリードしてきた稲田定重が理事長を退任し、代わって専務理事の山森欣一(55)が理事長に選任された。その後開催された臨時理事会にて、新たに酒井國光が会長に推挙され就任した。なお、新体制は下記のとおりである。（理事、監事、評議員の任期は、平成11～13年の3年間）〔総会・理事会の詳細は次号〕

- ◎顧問：古原和美（長野） 柴田金之助（岐阜）
遠藤登（東京）稲田定重（福島）
- ◎会長：酒井國光（茨城）
- ◎理事長：山森欣一（東京）
- ◎常務理事：八木原罔明（群馬）、岩崎洋（栃木）、
尾形好雄（東京）、中川裕（東京）、野沢井歩（神奈川）
- ◎理事：大内倫文、戸谷薫（北海道）、八嶋寛（宮城）、
名塚秀二（群馬）、古関正雄（神奈川）、田辺治（愛知）、
林雅樹（京都）、南勲（大阪）、名越實（広島）
- ◎監事：保坂昭憲（福島）、中岡久（埼玉）
- ◎評議員：阿部淳、辻野治子（北海道）、松館正義（青森）、
丸山芳雄（秋田）、那須宗一、菅原和明（山形）、
小島守夫（栃木）、寺沢玲子（埼玉）、天城敏彦、
橋本康弘（東京）、青木茂（山梨）、西嶋鍊太郎（石川）、
中村正勝（長野）、大西保（大阪）、今村裕隆（山口）、
国澤鎮雄（高知）、下田泰義（長崎）

東京集会のお知らせ

日時	6月28日（月）午後7時～
内容	中国自然地理図集について
場所	HAJルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分） 又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分）

9-21 カジャチャオ (カ加峭峰・Kajaqiao)

- * 山脈：ニエンチェンタンラ山群。
- * 位置：ラサ (3,648m) の東。
[30° 5' N, 93° 5' E]
- * アプローチ：ラサからは、ナチュまで111km。
ナチュからチャーリアツェ (4,450m) まで
は240km。ここから30kmほど東にあるター
ツェ (4,190m) がBCとなる。
- * ルートの所要日数：未踏。
- * 山の概念：主峰6,447mの周辺には、チャクチョ
(6,400m)、モナムチョ (6,000m)、山群
の最高峰6,575m峰などがあり、共に鋭い
二等辺三角形形状の美しい山容である。
- * 通常の登山時期：春、夏、秋
- * 山名：別名「チャチャチョ」長野隊はこちらを
採用したが「雪域神山」では、カジャチャ
オとしている。
- * 参考文献：無し。

登山の概要

主峰 (6,447m)

1994年

4月～5月 長野県山岳協会隊

翌年の本番のために14名で偵察に入る。4月26日登山基地のタツェに入り、東面のチャチャド側に4名が入り北東4,530mまで到達。一方、西面のタツェ側に3名が入り北西面の氷河舌端まで到達した。

[隊長：古島俊彦(46) 木内三四郎(60) 中村紘二(49) 神農和光(42) 浅川浩行(30) 久保田祐一(29) 栗田貞夫(48) 泉山芝之(35) 中村賢二(30) 篠崎順一郎(44) 嶋津正道(34) 林勝洋(50) 竹内毅(60) 小林重治(56)]

[チャチャチョ 偵察6,447m (長野県山岳協会 西藏東部登山隊) 「山と溪谷709号」1994年8月号]

1996年

4月～5月 長野県山岳協会隊

[隊長：古島俊彦(48) 林勝洋(52) 泉山茂之(47) 篠崎順一郎(46) 齊川康成(36) 嶋津正道(35) 武井利彰(29)]

9-22 サンディン・カンサ (桑頂抗沙・Sanding Kansha)

- * 山脈：ニエンチェンタンラ山脈。
- * 位置：ラサの北北東約135km。ニエンチェンタンラの東北東約100km。
[30° 9' N, 91° 5' E]
- * アプローチ：ラサ(3,648m)から北のヤンパーチン(4,280m)までは87km。さらにダムシュン(4,360m)まで75km。ここから約60km先で公路を離れて川沿いに進んだ4,800m地点がBC。
- * ルートの所要日数：1992年の日本隊は、9月14日BC建設後、10月9日に初登頂した。
- * 山の概念：
- * 通常の登山時期：春と秋
- * 山名：別名チヨモ (穿莫)
- * 小史：1992年秋日本隊が初登頂。

- * 参考文献：[桑頂抗沙峰登山隊報告 (同隊)
1994年3月刊]

登山の概要

主峰 (6,590m)

1992年

9月～10月 東面 日本登山隊

9月22日東面4,800m地点にBC建設。27日5,250m地点にC1、10月4日5,870m地点にC2建設。9日松永、菊池がアタックし初登頂に成功した。

[隊長：川上隆(65) 松永敏郎(59) 中村重行(54) 菊池一郎(46) 佐藤智恵子(39) 小林たか子(38) 藤本浩二(24)]

9-23 タンラ・ポ (唐拉・Tanglho)

- * 山脈：ニエンチェンタンラ山脈。
- * 位置：ニエンチェンタンラ南東峰の東約3.2km。
- * アプローチ：ラサ(3,648m)から北のヤンパーチン(4,280m)までは87km。さらにダムシュン方向へ進み、公路を左に折れた4,700m地点がBC地。
- * ルートの所要日数：1995年の中央大学隊は、3月4日BC建設後、3つのキャンプを出して16日に初登頂した。
- * 山の概念：中国で発行されている「中国登山指南」と「雪域神山」の地図によれば、「タンラ(6,336m)、Tanglha(6,330m)は、中央大学隊の概念図の6,336m峰に付けられており、中央大学隊がタンラ・ポとしている6,394m峰は、その西側の山で中国登山指南では、6,394mの標高が記入されている。
- * 通常の登山時期：春、夏、秋

登山の概要

主峰(6,394m)

1995年

3月 西 稜 中央大学隊

3月4日東面4,700m地点にBC建設。5日ヤクと馬で輸送して5,300地点にC1、9日5,600m地点にC2建設。15日プラトー6,100m地点にACを出し、16日黒川、岩立、田村、佐々木、山元の5名が初登頂に成功した。
[隊長：黒川恵(44) 岩立実男(25) 田村明久(22) 佐々木英一(23) 山元宏彦(22) 國分浩樹(22)]

[タンラ・ポ(6,394m)登頂(中央大学学友会体育連盟山岳部)「岳人576号」1995年6月号 現役大学生主体で登ったチベットの未踏峰タンラ・ポ(黒川恵)「山と溪谷720号」1995年7月号]

9-24 ジャドゥ (加杜・Jado)

- * 山脈：ニエンチェンタンラ山脈。
- * 位置：サンディン・カンサの北東約5.3km。
[30° 9' N, 91° 5' E]
- * アプローチ：ラサ(3,648m)から北のヤンパーチン(4,280m)までは87km。さらにダムシュン(4,360m)までは75km。さらに60kmほど先で公路から左に入った4,850m地点がBC地。
- * ルートの所要日数：1997年の長野隊は、5月4日BC建設後、2つのキャンプを出して11日に初登頂した。
- * 山の概念：中国で発行されている「雪域神山」によれば南西と西に低いピークがあり、山容は三角錐である。
- * 通常の登山時期：春、夏、秋

* 参考文献：第36回海外登山研究会資料「日本山岳協会」1988年2月刊

登山の概要

主峰(6,088m)

1997年

5月 長野県山岳協会隊

5月4日東面4,850m地点にBC建設。6日ヤクで輸送して5,350地点にC1、9日C2建設し11日藤森、小池、渡辺、池田、山本の5名が初登頂に成功した。
[隊長：野沢仁三郎(58) 藤森正彦(45) 小池満(56) 三沢悦郎(47) 池田正弘(36) 渡辺剛(33) 山本義昌(26)]

9-25 キズ (居孜・Kyizi)

- * 山脈：ニエンチェンタンラ山脈。

* 位置：ヤンパーチンの北西5.4km。

[30° 2' N, 90° 5' E]

- * アプローチ：ラサ(3,648m)から北のヤンパーチン(4,280m)までは87km。ヤンパーチンからチョム・カン方向に公路約10kmほど進み、公路から離れて右手に入り、ジャラ・チュウの4,600m地点がBC地。
- * ルートの所要日数：主峰は不明。II峰の1997年日中合同隊は、8月8日BC建設後、2つのキャンプを出して16日に初登頂した。
- * 山の概念：「雪域神山」によれば6,206m峰にキズ峰の表示がある。主峰の西南西3.5kmに6,079m峰があり、長野県山岳協会と西藏登山協会の合同登山隊は、こちらをキズ峰と呼称している。尚、主峰の西7.5kmにルツ峰(6,154m)がある。
- * 通常の登山時期：春、夏、秋
- * 参考文献：第36回海外登山研究会資料「日本山岳協会」1988年2月刊

登山の概要

主峰(6,206m)

1995年

7月～8月 大阪府教職員山の会隊

8月15日、小畑、川端、村田、内田の4名が初登頂。16日にも二度目の小畑と岡部、中上、近藤、岡本、西森も登頂した。

[隊長：樋口民雄(49) 服部義親(55) 小畑和人(45) 夏川照章(36) 川端章治(36) 竹内靖夫(37) 村田実(40) 浜谷哲次(45) 藤本慶信(41) 山本一夫(45) 近藤英正(46) 岡本靖雄(52) 内田正俊(34) 八田雅廣(46) 岡部一利(36) 森下健(44) 渡辺直之(42) 中野毅(35) 伊藤基治(48) 益田晴夫(47) 山本一壽(40) 中上俊之(36) 戸梶邦子(49) 猿田茂(44) 吉川清(45) 西森公男(45) 他支援隊員9名、生徒12名]

[中国 西藏自治区 念青唐古拉山脉 君孜峰 (1995年 大阪府高校生日中友好登山隊) 1996年7月刊]

II峰(6,079m)

1997年

8月 日中合同登山隊

8月7日、4,600m地点にBC建設後、11日5,350m地点にC1、15日5,850m地点にC2を出して16日初登頂に成功した。

[日本側隊長：武田武(64) 増子春雄(63) 中村正勝(52) 堀内利美(60) 平田恒雄(62) 堺澤清人(62) 星野吉晴(57) 唐木真澄(53) 小平忠敬(50) 古島俊彦(50) 本島護(46) 小山峰男(62) 上田修美(55) 上田典子(53) 西田均(42) 藤森秀彦(34)]

9-26 チャンサンラム (姜桑拉姆・Changsanglamu)

* 位置：ラサ(3648m)の南西約180km。

[28° 8' N, 90° 3' E]

* アプローチ：ラサからはカンパ・ラ(4,756m)に登り、ヤムドク・ツォからランカーズからカロ・ラ(5,036m)へ向かい手前の北山麓の4,700m地点がBCである。ラサから車で半日の行程である。

* ルートの所要日数：92年の日中合同隊は、4月25日にBCを建設し、キャンプ2つを出して5月2日に初登頂した。

* 山の概念：主峰(6,324m)の北東と西に稜が派生している。なお、北西に、カルシュン(6,674m)、西にジェットンスンソン(6,249

m)、カルシュンとの間にも双耳峰(6,496mと6,536m)もある。

* 通常の登山時期：春、夏、秋

* 小史：1992年春、日中合同隊が、初登頂した。

登山の概要

主峰(6,324m)

1992年

4月～5月 北東稜 日中合同隊

4月25日北山麓の4,700m地点にBC建設。30日5,500m地点にC1、5月1日5,700m地点にC2を出す。2日飯澤、西沢、小松、タンシン・ドルジ、カイソン、張と女性のゾガ、

ジジの8名が初登頂した。

[日本側隊長：百瀬斐敏(61) 飯澤元啓(47)
西沢晃(30) 小松善仁(27) 林恵子(42)

中国側隊長：ドジブ(52) タンシン・ドル
ジ(30) 張石生(30) カイソン(28) チョ
ガ(19f) ジジ(23f)]

9-27 ジェトンスンソン (解同速送・Gyaitongsogsum)

* 位置：ニンチンカンサの南南東約16.4km。チャ
ンサンラムの西約5.9km。

[28° 8' N, 90° 2' E]

* アプローチ：ラサからはカンパ・ラ(4,756m)
に登り、ヤムドク・ツォからランカーズか
らカロ・ラ(5,036m)へ向かい手前の北山
麓の4,900m地点がBCである。ラサから
車で半日の行程である。

* ルートの所要日数：未踏

* 山の概念：主峰(6,249m)の北に5,859m峰、
南西に5,921m峰、南東に5,693m峰をもつ
三角錘状の山。北西にカルシュン(6,674
m)、西にチャンサンラム(6,325m)、カ
ルシュンとの間にも双耳峰(6,496mと6,5
36m)もある。

* 通常の登山時期：春、夏、秋

* 参考文献：第36回海外研究会資料「日本山岳協
会」1998年2月刊

登山の概要

主峰(6,249m)

1997年

4月～5月 北面から西面 長野県山岳協会隊

4月25日北山麓の4,900m地点にBC建設。

26日ガラ・プーの5,100m地点にABC、28
日5,350m地点にC1を出す。5月1日5,650
m地点にC2建設し、5,921m峰とのコル直
下5,800mまで到達したが、登頂を断念した。

[隊長：中沢征一(59) 小野欣彦(43) 松下
徳孝(23) 大谷勇人(32) 斎藤順子(37)
戸谷一美(26) 小林佐知子(27) 井出恵美
子(33)]

9-28 モンダ・カンリ (蒙達崗日・Moida Kangri)

* 位置：ラサ(3648m)の南南西約145km。

* アプローチ：ラサからはカンパ・ラ(4,756m)
に登り、ヤムドク・ツォへ下りてランカー
ズを(4,472m)を経てロー・ラ(5,198m)へ
向かいプマヨン・ツォの東岸を行きBC地
点となるモンダ・ラ(5,266m)に着く。ラ
サから車で1日の行程である。

* ルートの所要日数：92年の日本隊は、7月30日
にBCを建設し、約一週間で2つのキャン
プを出して6,000mに達した。

* 山の概念：主峰(南峰6,422m)と南峰の双耳
峰。

* 通常の登山時期：春、夏、秋

* 山名：南にある部落の名前。

主峰(6,422m)

1992年

7月～8月 西面 もんたにゅ会隊

7月30日モンダ・ラにBC建設。ABCを
5,550m地点に、C1を5,850m地点に建設し
たが、C1から上は、逆層のもろいスレート
状の岩場と支点のとれない厳しいヤセ尾根が
続き、約6,000m地点で登頂を断念した。

[隊長：青柳健 貝山秀明 清義幸 山本碧
山本恭平 熊木八洲子 加納昭明 大木悦
子 秋山文子 茂木民子 岡部智恵子 奥
田博]

[東チベットの空白の地モンダ・カンリに遊
ぶ(青柳健/奥田博)「山と溪谷690号」
1993年1月号]

登山の概要

9-29 ツァン・ラ (蔵拉・Zanglha)

- * 位置：ラプチェ・カンの北西約55km。シシャパンマの東北東約67km。
[28° 9' N, 86° 0' E]
- * アプローチ：ラサ(3,648m)からティンリ(4,342m)を経て公路から離れ、ポー・チュー沿いにBCまで車で3日間の行程。カトマンズ(1,303m)からは、車で3日間の行程でBC。
- * ルートの所要日数：1985年岩手隊は、キャンプ2つを出して6,400mまで。
- * 山の概念：主峰(6,496m)の北に6,323mのII峰が在る。独立した山群なので立派に見える。
- * 通常の登山時期：春と秋

登山の概要

II峰 (6,323m)
1996年

9-30 カバン (喀邦・Kabang)

- * 山脈：ジエロン谷左岸山群の最高峰。
- * 位置：ジエロン県の南南東約30km。カンペンチンの西北西約18.4km。ヤンラ・カンリの北東約31.7km。
- * アプローチ：ラサ(3,648m)からティンリ(4,342m)を経てシシャパンマ北山麓を経てペク・ツォの南を通りマ・ラ(5,234m)を越えて、ジエロン県を経て北西面のグン(4,150m)まで車が入り、ラサから3日間の行程。カトマンズ(1,303m)からも、グンまでは車で3日間の行程である。グンからBC(4,700m)までは徒歩で3時間。ポーターを雇用する。
- * ルートの所要日数：未踏。
- * 山の概念：主峰(6,717m)の北西約2kmに6,231mのスノーピークがあり、そこから北に長い尾根が派生している。また主峰の東に短く傾斜のきつい尾根が派生している。西に6,237m峰がある。
- * 通常の登山時期：秋。マ・ラの積雪の状態によっ

7月～8月 滋賀県高体連隊

7月27日車の終点4,400m地点にABC建設。29日ヤクを使って4,750m地点にABC建設。31日ヤクを使って5,400m地点にC1建設。主峰を断念し、5,800mのタルチョ山を越えた5,300m地点に8月5日C2建設。翌日、澤山、藤永、小林、青木、シェルパのパサン、ンガテンバ、パサン・カミの7名が初登頂に成功した。

[隊長：山村秀人(45) 澤山恵(43) 藤永誠志(42) 上山修(35) 青木善慶(35) 五十子満(41) 井上茂(42) 片岡幸一(33) 北村仁司(36) 小林広幸(32) 佐野良樹(38) 富江宏(34)]

[蔵拉 STEI' 96 報告書 (滋賀県高等学校体育連盟登山部チベット学術登山隊) 1997年3月刊]

ては、春の登山に大きな影響が出るため)

- * 小史：無し。1998年秋H A J隊が偵察のために入山したのが初めて。

登山の概要

主峰 (6,717m)
1998年

10月 北面 日本ヒマラヤ協会隊

10月20日、東面ナス氷河舌端下の4,700m地点にBC建設。主にナス氷河からの登路を探った。

[隊長：山森欣一(54) 樋上嘉秀(54) 太田康夫(45)]

[未踏の頂 カバン(6,717m)偵察報告〔付〕ヤンラ・カンリ北面を探る (日本ヒマラヤ協会カバン峰偵察隊) 「ヒマラヤ326号」平成11年1月号 未踏の峰に憧れて チベット、カバン峰とヤンラ・カンリ偵察記 (山森欣一) 「山と溪谷763号」 1999年2月号]

9-31 ザンセル・カンリ (蔵色崗日・Zangser Kangri)

* 位置：ラサの北西約720km。サガの北約568km。

ウルグ・ムスターグの南南西約273km。

[34° 3' N, 85° 8' E]

* アプローチ：ラサ(3,648m)からシガツェ(3,836m)を経てラズーの西でヤル・ツァンボ江を渡りチャンタン高原に入り、ゴムツァカ峠を越えて5,200m地点のBCまで車で10日間の行程。

* ルートの所要日数：1990年の日中合同登山隊は、5月12日BC建設後、19日に初登頂した。

* 山の概念：6,460mの主峰を中心に南南西に6,408m峰、南に6,370m峰、東北東に6,360m峰、北に6,445m峰などがあり、さらに北にはこの山群の最高峰になるベイ・ザンセル・カンリ(6,508m)がある。

* 通常の登山時期：春と秋

登山の概要

主峰(6,460m)

1990年

4月～6月 東面 日中合同登山隊

5月3日東面5,200m地点にBC建設。16日5,700m地点にC1、18日6,000m地点にC2建設。アタック隊13名はそのままC2に泊まる。翌日小雪で視界不良の中、田村、小松(達)、西田(均)、山本、伊藤、麻山、清水、サンジュ、アカブー、ツェリン・ドルジ、ラバ、タシ・ツェリン、タンシン・ドルジが初登頂に成功した。

[日本側隊長：田村宣紀(49) 小松達(44) 城克之(43) 西田均(36) 浅川行雄(36) 山本吉人(24) 泉山茂之(31) 清水公男(42) 伊藤隆(28) 麻山智晃(39) 北条昭吾(46) 中国側隊長：ゴブー(57) サンジュ(37) アカブー(31) ツェリン・ドルジ(30) ラバ(26) ザシ・ツェリン(24) タンシン・ドルジ(28)]

山の情報誌「岳人」

GAKUJIN

岳人

毎月15日発売 (日・祝日の場合は前日) 定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。

お求めの本誌に乱了、落丁がありましたらお取り替えいたします。

99年

★ 1月号
2月号
★ 3月号
4月号
★ 5月号
6月号
★ 7月号
8月号
9月号
★ 10月号
11月号
12月号

特集

雪の槍ヶ岳・穂高連峰・笠ヶ岳に登る再発見・八ヶ岳 森の逍遥から氷瀑まで
魅惑の雪稜、滑降三昧の後立山連峰
残雪の上越国境、奥利根源流を訪ねて
新緑の頸城・戸隠 北の山、南の山
南アルプス、鋸岳から光岳、深南部へ
花、尾根、沢の東北の盟主・朝日と飯豊
幽遠の黒部溪谷、岩壁、源流、高原へ
森と尾根と谷、紀伊半島の大峰・台高
南会津と奥美濃、山里の魅力も探る
秋深い奥秩父と西上州 その山と人
岩と雪の殿堂・劔岳と立山連峰へ

(★は特大号・800円となります)

東京新聞出版局 (中日新聞) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674
東京本社 全国の書店で発売中/中日新聞販売店でも取りつぎます

■ 寸 感 ■

第19回登山医学シンポジウムが富山県の立山山麓で開催された。このところ目につくのは、発表されるものの多くが、「現地」ものであることである。ムスタグ・アタ登山やトレッキングに随行した筑波大学チームによる報告などはその代表的な例である。

かつては、研究室内の動物実験などの報告が多く、登山者には分かりにくいなどの不評が聞こえていたことを考えると特段の進歩と云えよう。

(山森)

事務局日誌 (5月)

- 6日(木) 山森専務理事中国から帰国
7日(金) フジTV取材 (12歳コンデ・リ登頂の件について)
10日(日) 寺沢常務理事パキスタンから帰国
20日(木) ~22日(土) 第19回日本登山医学シンポジウム (於: 富山、山森)
23日(日) 中国登山協会訪日代表団歓迎会 (於

かんぼヘルスプラザ東京、山森)

- 28日(金) キンヤン・キッシュ壮行会 (於: 池袋 パサル、山森、八木原)
29日(土) 理事会(於、ルーム)、定時総会(於: かんぼヘルスプラザ東京32名)
稲田理事長を労う会(於: 池袋、高松35名)
29日(土) ~30日(日) アルタイ、チョム・カンリ、チベット連続各隊梱包
31日(月) 東京集会 (25名)

ヒマラヤ No.332 (7月号)

平成11年6月10日印刷 11年7月1日発行

発行人 山森欣一

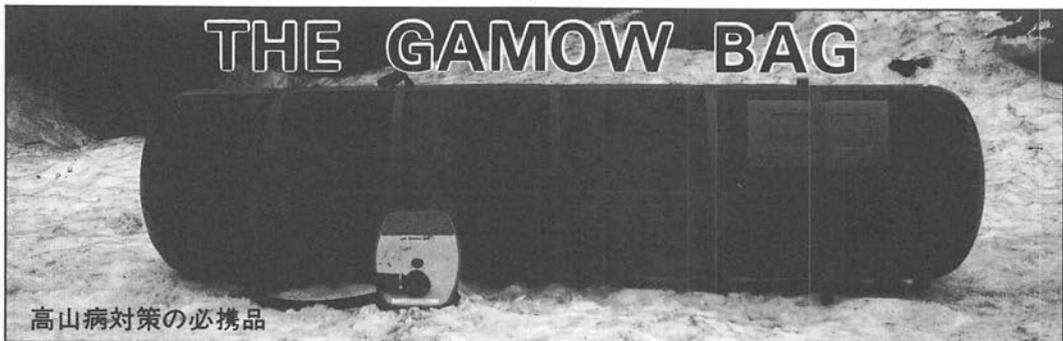
編集人 山森欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)

●パルスオキシメーター

(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店: 日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先: 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様の要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ



Royal Nepal Airlines

The way to Nepal ロイヤル・ネパール航空旅客代理店



SINCE 10th Dec. 1973

株式会社 西遊旅行

25 years with
exciting countries

SAIYU TRAVEL CO.; LTD.

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～

トレッキング・海外登山・シルクロード・
秘境旅行のパイオニア



株式会社 西遊旅行

運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■本 社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1
岩波書店アネックス5階
☎ 03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396
■大阪営業所 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5階
☎ 06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966
■カトマンズ連絡事務所 (JAI HIMAL TREKKING / SAIYU TRAVEL)
P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL
☎ 221707, 224248

●格安航空券はこちらに!



キャラバンデスク

キャラバンデスク東京(住所:本社内) ☎03(3237)8384(代) FAX 03(3237)0638
キャラバンデスク大阪(住所:大阪営業所内) ☎06(6362)6060(代) FAX 06(6367)1966

◆パンフレット請求や個人旅行のお申し込みは
フリーダイヤル をご利用下さい
(通話料無料)

☎0120-811395

西遊旅行ホームページ (<http://www.gol.com/saiyu/>)

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カーン本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(64)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブルーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブルーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区福岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004